

2004年11月5日

## 特集 松宮ガバナー公式訪問

足柄ロータリークラブ

### ガバナー紹介

### 第9グループガバナー補佐 西田 孝

松宮剛ガバナーにつきまして、ご紹介いたします。職業分類は、口腔外科で茅ヶ崎湘南RCの会員です。会長、分区代理地区の各委員長を歴任されまして、財団ベネファクター、遺贈友の会の会員、米山功労者の会員でもあります。みなさんもお存じかと思いますが、かつてないロータリーの理論家であり、月信5号をお読みなればロータリーの神髄を十分身につけられると私は思います。なお、奥様の繁子夫人神崎PGの紹介に歌手である繁子夫人は、理想主義者である主人をいつも背後から静かに見守っておられますが、一旦喚起あるときはためらわずに助言し、さらには先導さえする魅力と資質を備えられている人です、私も小田原RCの50周年の時に目にかかりましたが、シャンソンを歌われ素晴らしい歌声で聞かせて頂きました。そういう素晴らしい伴侶に恵まれた方です。

### 卓話

### 第2780地区松宮 剛ガバナー

みなさん今日は。山地さんがてっきりいられるとおもっていたのですが、分区代理も同期でしたので山地さんのお顔を見ていればもう少し気楽に話せると言う感じがします。何人かの人はお顔を拝見しておりますが、ほとんど初対面ですので緊張しております。よろしく願い致します。今日で59クラブ目の公式訪問になりましたので、いよいよ残すところ10クラブ少し寂しいという気持ちはなくはない、と言いますのは公式訪問が私の予測と違いまして、色々な人と出会いがありいろいろなお話が出来ますし、苦言もいただいたりしますが、でも楽しい時間を毎回持たせて頂いております。役得だなという気持ちで一杯です。こういうチャンスはこの年度でないとなないわけですから、消極的に受けるのではなくて、なるべく積極的に展開していければと考えております。各クラブに行きますとベテランのロータリアンにいじめられてきております。なんとなくいじめたくなるという感触をくすぐるようなんでしょうね。逆にいえば話しやすいと言うことなんでしょうかと思っております。それは、自分の性格の良い面だと思っています。例会のあと辛辣なといいますが、どんなお話でも結構ですので頂ければ有り難いと思います。最初にいつもお話ししておりますのが、月信第5号で若干ふれておりますが、国際ロータリーRIとクラブとの関係からお話ししたい。国際ロータリーの会員であるクラブが会員なわけですが、日本の特殊事情が分かりませんが他にも確かに島国はあるんですが日本においての特徴である会員の構成であるロータリアンにクラブが国際ロータリーの会員であるという自覚が乏しい。公式名簿はご承知だと思います。それは世界中の各クラブの例会の日時場所、会長・監事名や会員数がかかれておりますね。世界中のロータリークラブ・ロータリアンに対して責

任を持って定められている日時と場所で公式の会合を持っていると言うことを表明している名簿なわけですが、日本では、比較的安易に休会をする。それから例会の場所の変更日時の変更してしまう。I Mに移動例会とかそういうことが頻繁に行われるというのは、一つには自覚と責務、会員としてのそういうところが少しお留守になっているのではないか。一つの典型的な例としては、各国の世界大会に対する日本のロータリアンの参加状況。典型的なのは、今年ホスト国として大阪大会史上最高の47、000人近くの動員だったが、数時間たつと極端に人が少なくなりアーリーナーと言いますか誰か残っていただければならない役員らしき人しかいない。

2日目以降諸外国の人から一体日本人はどこに行ったのかという質問を一度ならず二度三度受けたわけです。これはツアーの組み方もあるでしょうがホスト国としては非常悲しい現実だったなあと思います。やはり全体をまんべんなく参加していくという工夫があってもよかったのではと思います。大成功とどこかでかいてありましたがとても我々参加したものにとってはそのように思われたい実情でした。みなさんもご記憶だと思います。

ですから例えば、60%ルールの出席に関する最低限のルールがあります。日本人はしばしば規定審議会に60%ルールではだめなんだ。やっぱり100%出席しなければだめなんだそういう改正案を規定審議会に提案するのは日本から毎回あるんですね。ですけど諸外国の人にしてみれば国際大会で見る日本人のロータリアンの行動を見てみると6割どころかおろか2割か3割にした方が日本人にして見ればよいのではないかと誤解されてしまう。つまり、理屈は誠に基本に忠実に言うけれども行いのほうは非常に違和感を覚えるということが国際大会の場で日本が信頼を得られない一つの理由になっているのではないか。

クラブが国際ロータリーの会員でありロータリアンはその構成員の一員であるという自覚がなんとなく抜けているからではないか。また他にはR Iの強調事項であります寄付とかあります。R Iのプログラムにも各クラブは国際ロータリーの会員である自覚を持ってそれからクラブが持っている自治権や主体性を持ってどのように活動を展開していくかということの中で両者の責務と主体性というかねあいの中で展開していかなければいけない。100%と受け入れるか、もしくは全部NOだとかいう反応は会員としての自覚に欠けているからではないか。まず、法定休日がありますね、これは日本の特殊な休日であって、世界中に通用しているものではない。自動的に休会になるのではなくてやはり理事会が法定休日を休会にする事が出来るということをルール上出来るということが書いてあるわけで、自動的ではない。その自覚があるかないかどうか。結果として休みになつてもいいんですが、会員としての自覚の基に理事会決定をして頂くことが必要である。振り替え休日までと言うことはややルール違反であるかもしれない。そんな気がします。国際ロータリーとクラブとの関係は、実は国際ロータリーが先に存在してクラブ群をどんどん誕生させていたという形ではなくて、歴史的に見ていってもクラブ群がその必要性のために国際ロータリーという別組織を作った。その必要性というのは、たとえば、世界の各地で主要都市でロータリークラブが活動を展開する際にもととのその方向性を分かっているにもかかわらずバラバラな活動になる可能性がある。それを一つ纏めていく団体が必要だと。

これは全米ロータリークラブ連合会が発足するところからの懸案だと思います。1922年6月5日以降は、国際ロータリーというものが出来た。そこでだしてあります綱領とか定款細則を世界中のクラブが遵守しなければいけなくなったということをご承知のとおりだと思います。このことは同時にそれ以前に発足したクラブはがあるわけで、R Iの定款細則・綱領に従わないクラブというものはあるんですね。これは知識としてどこかに置いておけばいいんですが特権法クラブというのですが、勿論1922年6月5日以前に創立したクラブについても今のR Iの定款細則を採用して欲しいことはずっと強調しているわけですが、みなさんご存じのように手続き要覧をみるとR I B I、但しR I B Iという但し書きがあるのをご承知だと思います。これは中間管理組織といえよるしいのだと思います。地区でもない、国際ロータリーとも違う。R I B Iに属しているロータリークラブは人頭分担金の一部はR I B Iでとられ、残金がR Iにいく仕組みになっている。その中のいくつかのクラブは、やはり定款細則が全く国際ロータリーが提案しているものと違うものを採用しているクラブもあるのです。100いくつかと聞いておりますがクラブが存在している。昨今、国際ロータリーの定款細則に従わなくてもいいパイロットクラブというものが発足していることはご存じだと思います。2001年から2007年迄今回の規定審議会で5年で終結するものが6年に延期になったのは2007年というものはつぎの規定審議会がある。ですからその規則に従わなくてもいいパイロットクラブがサイバークラブも含みますね。そういうクラブが規定審議会に対してなにがしかの提案が出来るという余地を残したいために1年延期になった規定審議会の改正なんです。つまり規則に従わないで活動している現実もある。大多数のクラブは定款細則、綱領を完全に遵守しなければならないという約束になっておりますので、我々はそういう中に存在しているクラブであるという認識は持って頂きたい。例外を話してしまうとややこしくなりますので、国際ロータリーにクラブ群がいくつかの権限を委譲しました。それは今言いましたロータリーの理念を守る中核を守る。つまり、綱領を推進しているかどうか、定款細則を守っているかどうか、それを監督する権限を委譲しております。それからクラブ群の間の連絡調整、情報媒介機能、もう一つは、ロータリークラブの拡大という大まかに言いますと4つの機能を国際ロータリーにクラブ群がゆだね、その代わりに我々が人頭分担金を払っているという構図になっています。例えば、月信の5月号をお読みになれば分かると思いますが、ルールは完全に従わなければならないがR Iの提唱するプログラムについては100%受け入れなければならないということはないということを確認しておきたい。今年度足柄ロータリークラブが最重要課題をしているこういう活動に取り組みたいと言うことであればあえて国際ロータリークラブが展開して行かなくてもいいわけです。それはクラブの自治性と主体性という活動の中で展開して頂ければいい。ただ全てをこちら側の要求ばかり出来ないのが先ほどからいっておりますR Iのクラブが会員であるということ。その自覚と責任というものが完全に欠如した状態で自治権を主張されてもそれは困るということになります。今年度は100周年という事です。ロータリーを祝おうと言うことですが出来れば年度の後半に盛り上がった雰囲気になっていけばいいなあと考えますし、年度の終わりに場合によってはみなさんの要請があれば地区としても一緒に大いに

祝うと言うチャンスも考えてもいいかなと思っております。でもこれは地区主導でやるのではなくてみなさんの声が盛り上がってくれば地区としても何とかしたい。その前にこの年度の時期一番考えて頂きたいのはむしろ下の100年の歩みですね。ロータリーが何故にここまで発展し、拡大してきたのか。その発展を支えてきたのは基本的になんなのかを見つめ直して頂きたいと思っております。そのことによってそれぞれのクラブが充実して頂くこと以上に私の年度のお役目としての願望はございません。確かに寄付をいくらお願いしますという部分もありますが敢えて申し上げないで、むしろクラブが充実するために日頃のみなさんの運営や活動の中で見落とししている。そういうところがあるなら、それに目を向けて頂きそこを改善して頂きそれによってクラブ充実の実をあげて頂きたいと考えております。ここからのお話は、月信の2号にかかせて頂いたものと重複致しますが、ロータリーの特徴的な一番私の大好きな「入りて学び、出でて奉仕せよ」そういう短い言葉の中にロータリーのエッセンスが含まれていると。入りて学びの根本を支えているロータリーの会員相互の親睦についてですね。2号のタイトルは「巧妙に仕組まれた親睦の構造」というふうにかかせて頂きました。この巧妙に仕組まれたと言うことは結果としてそういわざるを得ないような効果を生んでいくからだとお考え頂きたい。その構造として4つ全て構造と言って良いか疑問はありますが一つは「一業種一会員制」と「毎週一回の定例例会への規則的出席」、「毎年交代制」、「徹底した平等」この4つであります。先ず「一業種一会員制」手続き要覧をお持ちの方は是非見て頂きたい。標準ロータリー定款の職業分類の所にかかれていますのは50名以下のクラブは5名まで同一の職業分類の会員を入会させることが出来る。51名以上のクラブは10%まで、そのようにご理解されていると思います。少し詳しく見て頂くとその条文の小さなタイトルは制限となっている。で文言は5名又はそれ以上正会員のいる職業分類にあってはそれ以上正会員をとってはいけないと書かれている。又はそれ以上と言うものがありましてこれがややこしい。但し51名以上の会員を要する場合によっては最大10%まで可能だと言うように考えられております。この下に暫定規定は2001年の改正によって現在在籍している会員は身分を喪失するものではないと書かれています。つまり、規定審議会が強い権力をふるうといっても今いる会員を退会させるような改正は絶対出来ないと言うことです。又はそれ以上にこだわりますけれどもここを解くにはもう一回前の手続き要覧をごらんになるとどういう会員構成になっているか。正会員が1名、シニアアクティブが1名、パストサービス1名、アデイショナル正会員が3名、特殊なものとして名誉会員も加えれば7名。ここからは50名以下というクラブに限定してお話ししていきたい。そういうルールを作って展開してきたが世界中の166の国と地域に31900の何某のクラブがあると思いますが50名以下のクラブが6名ないし7名の同一職業分類の会員を擁していたと考えた方がまあ自然ですよ。例えば名誉会員をのぞいてもいいんですが6名いるクラブが世界中にあると、ただ6名の職業分類にあってはどなたかが退会しなければいけないということはありませんよと暫定規定で言っている。

そのかねあいでも5名又はそれ以上正会員がいる職業分類にあってはそれ以上正会員をとってはけませんよとの読み取り方をしている。今度は条文の解釈ですけど例え

ば4名同一職業分類の会員があつては現行のルールではもう一名入会させることが出来ます。しかし、入会させないことも出来る。3名も2名の場合も同じだと思いません。極端の場合1名の場合つまり一業種一会員制を基本的に貫いているクラブにあってある職業分類について、現行のルールであればあと4名の会員を入会させることが可能ですけどやはりクラブの判断として入会させないと言うことも可能だ。そう解釈せざるを得ない。つまり現行のルールでも一業種一会員制をもし貫こうとするクラブがあるのならばそれは貫けることになっている。今度はクラブで細則のなかで一業種一会員制ということを決めたらどうか、推奨クラブ細則というのは単に推奨されるにすぎない。標準ロータリークラブ定款、国際ロータリー定款細則に矛盾しない限りクラブはその実情に応じて変えていいと書いてあります。細則で一業種一会員制を謳ったらどうでしょう。さらに但し書きがありまして、もしも標準ロータリークラブ定款と国際ロータリーの定款細則に矛盾しているかもしれないと疑問がある場合は、事務総長を介してR I理事会の審議を乞わないといけないと書いてあります。足柄ロータリークラブがそのようなことを展開してもいいと思うのですが、先ほどの条文の解釈からしますと確信を持ってR I理事会はその細則で一業種一会員制で行くと決めた細則を拒絶することは出来ない。もし6名という事になればこれは頭から拒絶される。一名で行くというとは5名という制限の中で一名で行くのですから十分通用する。ですから一業種一会員制はルール上生きていけると言わざるを得ない。

そんなに一業種一会員制が大事かとなりますが、誰一人として世界中に同じ人はいないと言う意味ではみなさん異質なわけです。ロータリークラブ会員構成は職業も違いますよと言うことで極限状況で異質を表現したのがロータリークラブの会員構成である。みなさんにとっての足柄ロータリークラブの中で、非常に気の合う仲間もいます。どっちともいえない人もいるし、気の合わない人もいます。足柄にはいないと思いますが場合によっては天敵と言える人も会員の中に存在する場合もある。異質という意味で言って自然界を凝縮して会員構成をしているわけですから、そういう人がいても不思議ではない。異質の人と戦いあってどちらか退会するまで何か決着するまで活動を反発しあうかというところロータリークラブはそういうクラブではないと言うことはご承知の通りである。むしろ、天敵と言える人と一つの活動を一緒にやり、二人で成し遂げていく局面の方が多いわけですね。そういう過程で異質の人たちは、それぞれ克服していかねばならない部分が色々ある。理解しなければならぬ。寛容という部分も必要であろう。そうしたことによって一つの活動を達成していく。これはそれぞれに教育的効果が生まれてくる。そういう教育効果を見て米山梅吉さんはロータリーの例会が人生の道場である、佐藤千壽さんは人生の学校であると言っている。これは、ロータリーの親睦の構造が持つ教育的側面をとらえたことだろう。この異質の人たちは、なるだけ頻繁にあつた方が異質のものの接触が多いほどお互い触発されるチャンスも多い。その最大の回数をロータリークラブは週一回の例会で実現している。これ以上忙しいビジネスマンが、50名とか100名とかの単位で一同に会することは難しいと思います。非常に希な週一回会うと言うチャンスを提供しているのも教育的側面を狙つてのことだろう。さらに、毎年交代制というのは非常に持続する組織に比べると腐敗の種を育てていかないという点で非常に爽やかだろうと思いますが口

ロータリアンにとってもう一つの意味は、得手でも不得手でもその一年というくりの中でその人らしく受けていく例えば会報、だいぶテープ起こしで大変になったようですが、昔はもっとたいへんだった。4頁という割付も含めて外部の講師の卓話をテープ起こしは大体4～5時間かかりました。さらに専門用語知らなければ調べるなり、問い合わせするなり正しくする。しかも、4頁の割付の中にする。今のように融通が利くというわけにはいかない。次週の例会に間に合わせていくことは大変な努力だけどこれによって鍛えられた。しかも誰もが同じようにやることにロータリーの意味があるのではなくて、その人がその人らしく一年というくりの中で展開していくことにロータリーの意味がある。そういった3つのこと。異質である。接触するチャンスが多いほど触発される機会がある。得手でも不得手でもやる。こういった事によって自己改善のエネルギーを受けるのです。今度はその土壌としての平等なのですが、月信に書かせて頂いた有名な丸山真男の日本の思想(岩波新書)という本があります。その「であることととすること」というのを本をお読みになった人はおわかりになると思いますが、「であることととすること」の最初の方で語っている自由について語っている。「自由は置物のようにその場にあるのではなく、絶えずそれを獲得しようと繰り返し働きかけることによって、やっと達成できるか出来ないかという危ういものである。もしも、働きかける意欲を失ってしまったら自由は名前だけのものになる。」「自由」という言葉を「平等」という言葉に置き換えても全くそのまま言い切れることが出来る。平等は置物のようにそこにあるのではない、この部屋に入れば自然に平等が実現できるものではない。そのロータリアン全ての人、平等でなければならぬという働きかけを繰り返すことによってやっと達成できるか出来ないかという危ういものだ。もしも、働きかける意欲を失ってしまったら平等は名前だけのものになり、従来通りの序列関係に墮してしまうだろう。そこにはアクティブロータリアンこそがロータリアンという唯一の種類だとガイカンデイカーがロータリー通解の中で語った意味もあるのです。積極的に自分を出し、働きかける。ロータリークラブというのはここを離れますと親会社と下請けとの関係もいらっしやるかもしれない。だけでもロータリーの例会にくる場合は日常の関係はかなぐりすてて、ここには対等なロータリアンとしての人間の交流が可能な場所なのだという自覚を持って一人一人が参加する。そこから始まるのがロータリーの親睦であろう。「入りて学び 出でて奉仕せよ」と自己啓発された会員が家庭に戻り、職場に戻り、地域社会に戻ったときにそれぞれをいかに改善しようとしているのか、そのことを問いかけるのがロータリークラブ運動だと思います。職業奉仕がロータリーの金看板だと言われますが、何故金看板なのか、と言うことに答えてくれるのがなかなかない。企業責任であるとか、売り手にも買い手にもいいとか、職業倫理を高揚しようとか、そういう叫び声はロータリーの内々の世界よりもむしろ一般的に企業の社会、経済社会において非常に厳しいものがあります。そういうことだけとて言えばロータリーの金看板は出てこない。そのロータリーの金看板だといえる理由は、今、話しましたロータリーらしい親睦交流によって自己改善のエネルギーを多分に受けた人がその職場や同業をいかに改善していくか、いかに価値あらしめていくか、そこから展開されるものこそがロータリーとしての金看板としての職業奉仕だろう。このスタート、親

睦それがなければ金看板としての職業奉仕はないだろうとさえ思っております。親睦を基本的にクラブの中で見直していくことによってクラブ充実が図れるなら今年度大きな節目として、新たな100年のスタートとしてこの年度の意義は最大に発揮されるのではないかと。時間になりましたご静聴ありがとうございました。

(休憩)

## クラブフォーラム

松宮ガバナーのコメントのみ掲載致します。

### \*クラブ奉仕について

松宮ガバナー　そうですね。100周年ということですね、皆さんに一応お話ししておかないといけないと思いますのは、地区として考えております100周年は、地区大会の決議の中にも盛り込まれてはいたんですが、ひとつは、財団奨学生、その学友ですね。財団学友。それから、まあ、GSEのOBもまあ、財団学友という風と呼ぶわけですが、こういう人たちを中心にしたクラブを結成する、まあ、ニュージェネレーションロータリークラブの結成ということですね、ひとつ目玉として掲げております。これはですね、もうすでに、その会員になろうという方が22名ほど集まっております、近々にはその創立総会をやります。今、所在地域、テリトリーというものが、事実上なくなっているということも、展開しやすいことなんですね。もしも、所在区域というものが、区域限界が、こう、はっきりしていますと、こういう展開はできないので、この地区内で、いろんなクラブでその、スポンサーをされた財団学友の人たちや、まあGSEのOB、そういう人たちが、まあ、例えば仮の名称としては、神奈川湘南ロータリークラブみたいな名前を小沢さんは考えているようなんですけれども、横須賀ロータリークラブをスポンサークラブにして、ニュージェネレーションロータリークラブを作ろう、と。そこでは、食事代を除いた会費ということで、人頭分担金、地区負担金、まあ、それから財団や米山に対する寄付は、まあ我々と同じようにやっていただいて、基本的に週1回例会を開いていただく、そういうロータリーの基本は守っていただいたクラブということで、特殊なものではないということですね。その会費をいま設定されていますのが、7万になります。まあ、食費はその都度、食べる人は食べ、食べない人は食べないということで、発足し、もしうまく軌道に乗るのであれば、地区内のクラブにとって、クラブの運営面についてはいろんな示唆を、まあプラスマイナス含めて与えていくかもしれませぬので、その取り組みにはご注目いただきたいというのが、ひとつですね。ニュージェネレーションロータリークラブ。

それから、この2780地区の、地区誌を作ろうと。今までそういったものがないので、どういう経過を経てこの地区が誕生し、その後どういう展開をしてきたか、これは裏話になりますけど、うちの地区の歴史というのは、ほとんどそのPGの抗争の歴史じゃないかみたいなことをおっしゃる方があってですね、大半は書く内容はそればかりじゃないかとおっしゃる方もあるんです。けれども、皆さんのお手元

に100ページ前後の地区便覧とかその程度で比較的読みやすい、堅苦しくないものを作成していこうというのが、地区誌の編纂。

それからもうひとつは、先ほどいいましたが、財団学友。これは我々がニュージェネレーションロータリークラブを作る、作らないということに関係なく、財団学友が過去も何回かチャリティーコンサートをやろうとしてきて出来なかった。今年度は100周年もあるし、最近その財団親善奨学生に回るお金が少ないんですね。そういう点でそのチャリティーした部分を、財団に寄付をして、しかも地区として財団親善奨学生にあてたい、という考えもあって、財団学友によるコンサートを支援しようとしています。これは3月の27日と4月8日だったかな。その2回。ひとつはグリーンホール相模大野。もうひとつは鎌倉の芸術館。その2箇所で開催する。当日の運営に対する動員であるとか、観客の動員について支援していこうと。まあ、この3つが、いま地区としては考えられております。

で、こうした公式訪問にまいりますと、さまざまな取り組みがありまして、今まで続けてやってきた活動をその色付けして拡大しようという、例えば芋ほりにしましてもね、もっと展開する範囲を広くしようとか、それから湯河原なんかでは、友好クラブの締結をされるとかね。それから、他国にもってます姉妹クラブと一緒にWCSに取り組んでいこうとか。まあ、色々あるようすけれども、まあ、先ほどのその、障害者のためのトイレマップというの、非常に意味のある活動だと思いますし。まあ、ささやかでもいいと思うんです。私はですね、そういうお祝いも確かにしたいけれども、やはりクラブがまず、実質として充実していただくということが達成できることほど、この年度における価値はないだろうと、考えております。

### \* 職業奉仕について

松宮ガバナー 職業奉仕という概念そのものの難しさといいますか、この職業奉仕という言葉がやっぱり、本来のものを見えにくくしている、という部分もあるのかもしれない。例えば社会奉仕という言葉で使うときの、奉仕と社会との関係っていうのは、対象と考えてもいいですよ？ 社会に対する、という風におもってもいい。国際も、国際という場で、と、そんな風に言ってもいいと。けども職業は、というと、これはですね、私流の言葉で言えばですね、つまりロータリーの綱領なんかをご覧いただきますと、職業の根底に奉仕の理想をおきなさいと、いうことを言ってると思うんですね。あの前文ですよ。つまりそうすると、これは、儲けるということと、人に有用である、ということ、対極にあるようなものの調和を、職業という場で考える、で、それを調和を限りなく追及していくという、ま、そういう活動、つまり、その職業という場における利己と利他との調和の追及といいますかね、そういう言葉に代えたほうが、全体としてはわかりやすいのではないかな、と思うんですね。しかも、ロータリークラブというのは、こう職業人、という名前の苗木があって、それがクラブという土壌に植えられて、その職業人にはそのいろんな職業人がいるわけですが、その土壌が先ほどのような効果を発揮するがゆえに、根が大きくなり幹が育ち、社会奉仕とか国際奉仕とか言う、枝葉がついてくると。まあ、そんな風に考えていいと思

うんですね。そういうその、いろんな職業の木が、ロータリークラブという土壌に、何本も会員の数だけ植わっていると。その人たちは、まあその個人奉仕といわれるのも、その苗木一本一本が、その枝葉をつけていく、という意味です。あの、アイサーブといういい方は僕はあまり好きではないですね。このアイサーブというのは、おそらく、あのライオンズクラブが、我々の綱領が書かれているようなところに、高らかにウィサーブといってるわけですね。まあ、その綱領よりも、その前にまず、我々は奉仕すると。そういうようなものに対して、アイサーブというものが出てきたのかもしれない。もっとももっと考えれば、今言いましたように、その職業人、いろんな職業人の苗木がロータリーというクラブの土壌で育って、それでその枝葉をつけていく。でもその根幹は職業であって、これをもとにこの職業の幹が大きくなりえない限り、ロータリークラブらしい意味合いはないわけですよ。で、枝葉であるといっていると思うんです。だから月信の第3号にも書きましたように、皆さんの年会費はクラブ親睦に使われて、諸経費に使われて、で、奉仕活動には使われていないと、では、奉仕活動の財源は、ご承知のとおりニコニコという、あてにならないものが財源になって、それを、クラブとしての活動に使っていると。そういう構図もですね、そのロータリークラブをよく表していると思うんですね。で、まあ職業奉仕委員会というクラブの中の委員会が、どういう活動をすればいいかということをよく聞かれましたが、私は、基本的に2つ。これは職場見学とか従業員表彰とか、職業指導とか、そういうことではなくて、結局職業をしょってロータリークラブに入って、その結果あなたの職業がどのように変わりましたか、と、そういうことを問いかけるのが、クラブの職業奉仕委員会だろうと。それがなければね、もしもいい効果を生まないなら、いる価値ありませんよと。そうでなければ、土壌が悪いか、どっちかですよ。こんないい土壌にいるんだから、当然効果があるだろうということを問いかけていくのが、職業奉仕委員会のひとつの役目。もうひとつは、非常にこう、仲間内だからできる、職業に関する卓話。こういったものを奨励していく。まあ、その2つがあれば、クラブの職業奉仕委員会というのはいいいんじゃないかな、と思うんですね。まそういうことを、この100周年という年度であの自覚していただいて、やはり、ロータリークラブというのは、職業人という、その個人個人を幹にした、そういう活動なんだな、ということをとらえなおしていただけたら、もう十分なんじゃないかな、とそう思います。ありがとうございました。

#### \* 社会奉仕委員会について

松宮ガバナー 100周年の祝い方については、やはり意味のある何か活動をクラブとしてやろうということと、ちょうちん行列とですね、その両方があるといいな、というのが願望ですね。でもね、まずちょうちん行列ありきではないと。そうではなくて、その祝うに足るだけの価値があるというだけのことに確信をもってこそ、その100年という偶然なおおきな節目に居合わせたことを、心底喜べると思いますので、まず、やはりその、クラブというものを見直し、意義ある活動を手がけ、その上で、この年度に居合わせたことを祝うと言うことではないでしょうか。

それからクラブが行います社会奉仕活動は、先ほども言いましたように、結局非常に限られた財源の中でクラブとしてやる意味は、確かに個人として、そのロータリアンがロータリーを離れてね、貢献していこうと、職業の場でもいいですし、地域社会でもいいんですけども。そういうことのひとつの教育的なプログラムとして展開するのだという側面がありますが、やはりクラブとしてやる活動というのは、本当に大切なことは、皆さんでやるなかで、本当に思いやるとか、一緒にやるということの価値と意義を確認しあうという作業が、どうしても重要だろうと思うんですね。そういう点では、単に、まあ、さっきのが悪いというわけではなくて、単なる寄付とかそういうものではなくて、やはり何か皆さんと色々な意味で力を出し合って、まあ職業的な知恵とか、いろいろなものを出し合って、しかも相互理解しながら何か展開できるという活動のほうがおそらく教育的といえますか、ロータリーがもってる教育的なという意味合いでは、クラブとして行います奉仕活動の局面でも発揮されたほうがいいだろうという気がしますね。やっぱり、クラブが行います社会奉仕活動で気をつけなければいけないのは、こう続けていかなければいけない活動だということが前提の場合には、本当に慎重でなければいけないというのは、本当にそれはそうだろうと思います。例えば、あの、まあ悪い例としていつも出してるんですけども、えー、30万を創立以来ガールスカウトに卓話にきていただいたときにお渡ししていると。で、それは最初は非常に喜ばれた。で、2年目も喜ばれた。3年目は、「あ、やっぱり30万ですか」というような感触をもたれた。その後はですね、続けていくわけですから当然その30万を受け手のガールスカウト側で、何に使おうということも決まってしまう。つまり予算化してしまうという。そういう行為が行われる。そこへもってきて、ロータリークラブの会員が激減して、この30万が非常にうちのクラブの奉仕活動の足かせになっている、というようなことになってきた場合に、減額をしても、それからやめるということになっても、どういう結末になるかということ、受けて側からの信用を失うということだけなんですよ。ですから、そのそういう活動には最初の時点でやっぱり、手をつけるかつかないか、ということを考えなければならなかったし、手をつけるべきではなかったんだらうと。で、中には社会に認知されていなくて、ロータリーがアイデアをこう結集してはじめてたことでも続けなければいけないことってありますよね。それはその地域社会が認知してくれるまで活動は継続していく。ただし、そのいいところで、必要な受け手を探して、その受け手に委ねていくという活動の年度もないと、あれもこれも、ということになりますね。それでまた縛られていきますし、それでこう続けていく活動というのはしばしばロータリークラブの活動の自ら首を絞めるようなね、そういうことになりかねないので、よほど慎重に。それからやっぱり、どういう団体がこの活動を担っていくのがいいか、ということを見定めて、そこに移していく活動の年度も当然必要だろうと。いい活動だから、これはロータリーの代名詞にしたいという願望があっても、あえてそれはやっぱりどこかの団体に委ねていくというのが、ロータリークラブのあり様だろうと思うんですね。実をとって名をとらないといえますかね。ま、そんなことで僕は、社会奉仕活動というのは難しいな、と思うんですね。でも、ささやかなことだが、公衆便所を掃除されてるおばさんがいたら、大多数は「ありがとう」といわないけれども、ロータリアンなら素直に

ありがとうございます、いつでも言えるという、そういう人格養成をしてるはずですから。それは言えるだろうと。それから駅のホームで、重いスーツケースをもって階段の前に居る人、エレベーターがないようだ、そういう時にはやっぱりあの、手を貸してあげるとか、そういう周りに居る人たちはね、しないから気持ちがないのではなくて、もう一步のところにいる人たちはいっぱいいると思うんですね。でも行動にいたらないという、その一步を我々は超える、そういう活動をしているはずですから。だからすぐにこう手を差し伸べられるという、ま、そんなことも大事だろうと。それからその、ささやかですけれども、お金はかからないけれども、こういう活動を独居老人の新聞受けを見回ってくださるとい活動ですね。で、たくさんたまっている、これはおかしいということになると、連絡をその近所にするなり、そういう連絡をするという活動をやったクラブがあるんです。それはですね、次の年度は、もうはっきりと新聞配達の人たちが受けていってくれた。これはささやかですけれども、こういう活動も十分我々のアイデアの中では出てきてもいい活動だろうと、ま、そんな風に思いました。ありがとうございました。

#### \* 国際奉仕について

松宮ガバナー 国際奉仕ですが、あのロータリークラブっていうのは、まあ入会されたと同時に、世界中に120万の仲間ができたという。これはですね、ただの言葉だけではなくて、本当に実質なものです。しかし、日本の国内におきましては、街中でロータリーのバッジを見つけると「やあ」って言うてるかということ、そうではなくてですね、目線が合うと目線を避けたりするっていう。これはあの、極めてロータリー的ではないですよ。そういうところ、これは先ほどもいいましたように、やっぱりロータリークラブっていうのは、違う集まりだよ、と。で120万の仲間ができたんだ。その人たちに対して、私もロータリアンとして積極的に働きかけていく、という姿勢をいつも、皆さん全員が自覚として持って頂きたいと思うんですね。で、それでこう自然にやると、そういう感覚が出てくるといいと思いますし。そういう積極性がある、ま、色んな別のしがらみや序列の中で苦しんでおられても、街中にでたらそんなしがらみはないんだし、ロータリアンとしてできればいつもバッジをつけてですね、それにふさわしい意識と動きをしていこうという自覚をもって生活していくことが大切じゃないかなと思うんですね。そういう意味では、本当に国際ロータリーは、もともと国境を越えて、人間が宗教やいろんなものを越えて、人類が融和できるというアイデアのもとに、みんな集まってる集まりだと思いますので。そういった点では、国際という、国際といいますとね、国と国との関係ということで、若干政治的なものが絡んでくるかもしれない。けども、ロータリーが展開してきました、世界社会奉仕というのは、地域社会を地球規模まで広げていった。そこにはまあ、いってみれば国境がないという。そういう中で、奉仕活動、WCS、えー、そういったものが活動が展開できるというのは極めてロータリーらしいことだと思うんですね。で、そういう風に非常にあの、最初から国境を越えた関係を取り結んでいくというのが、ロータリークラブのアイデアだろうと思いますので。もともと、世界規模のものだと、そうい

う認識だけは改めて皆さんお持ちいただいた方がいい。それでその世界規模なんだけれども、この地域社会をよくするためにそれぞれの地域社会で貢献していると。そういう人たちが週1回仲間として集まっているのが、ロータリークラブだと。そういうとらえ方になるかと思うんですけどね。

それから寄付については、これはやはり、多ければ多いほどいい、ということなのかもしれませんが。これは、自覚のもとに理解にふさわしい任意の資金が提供されてこそ本来の、なんていうんでしょうか、寄付ということになると思います。もしも国際奉仕とか財団の活動が見えにくいのであれば、もう少し見えやすくしてほしいという声をあげていく必要もあるし、ここはどうなっているんだ、ということを知っていただく必要もあると思うんです。そういうことをお聞きしながら、こちらも見えやすい活動にしていって、見えるからこそ実質に応じた行為をですね、何か貢献したいという気持ちを動かしていただいて寄付につながるということになればいいと思います。寄付が年会費になっているところもあるんですよ。こうして公式訪問にまいますと、毎月いくらかずつ強制的に米山も財団も集めているというところもあります。それはちょっと、やめてくださいとはこちら側としてはいいにくいんですけども、もう少し基本を理解していただいたうえで、結果としての金額が同じになるならこんな素晴らしいことはないと思います。やはり寄付は基本的には理解に応じた、任意で出そうということでないといけないだろうと思います。米山奨学会の普通寄付なんかは若干違いますよね。ほぼ年会費、負担金というような形で出ております。ただ、米山の活動とかに関しまして、皆さんからご批判も、公式訪問で頂くんですが、救貧といえますか、苦学している人たちを助ける、という視点ではなくて、優秀性を最大限の評価の対象としているという動きに変わってきていますし、どういう活動がいいかは、我々ロータリアンが声を出していかなければいけない。どの活動についてもそうだと思うんですね。地区のありかたについても、やはり皆さんの声が集約されて地区は変わっていくといえますかね。ま、そういうところがあると思いますので、責任をもって皆さんもいろんな活動を注視していただきたい、そんな風に思います。

### \* 新世代奉仕について

松宮ガバナー 特に、新世代に関する活動は、よほど性根をすえてかからないと、かえって足元をみられる。もともと、子どもは親の背中をみて育つという風にいいますね。これは親は親の背中を見れないわけですよ。つまり、自分には見えないところをみて育てている。見せたくないところをみて育てている、ということもいえる。自分で見えないわけですから。どういう姿かたちをしているのか自信もない。そこを子どもや青少年は見て育てているということが、やっぱり本質にあると思うんですね。だから過去ライラとかローターアクトとか、いろんなロータリーでこの地区でも活動してきましたが、しばしばですね、我々あのライラに来た人たちは、朝からラジオ体操をし、ごみ拾いをやってるのに、ロータリーの人たちはタバコ吸ってだべってた、とかですね。そういう批評をよく受けるわけです。むしろ我々は新世代とともに居て、ともに何かをすることによって、何かを得ているのは私たちのほうではないか

と。むしろその新世代、青少年の光をこちらが受けているような気がするんですね。それはその、おそらく相互作用だとおもうんですけれども。やはり、その本当にその活動というものは、なまじなことで手をつけていきますと、かえってその、見せたくない、というようなことを露呈しているようなことになってしまうことが多いと思います。社会奉仕活動をやるということもかなり重いことですが、新世代に対して、何か貢献していこうとするのも、むしろ貢献していこうとする視点よりは、ともにいて分かち合う、お互い何かを得るものがあれば、という。そういう感覚で関わっていったほうが、実質的なことができるんじゃないかな、と新世代についてはつくづく思いますね。

また、アドベンチャーなどはですね、こう昨年から強調されております、ロータリー家族といいます、ロータリー家族という言い方が適切かどうかわかりませんが、家族委員会を設置してくださいという要請が今年度のはじめ、ちょっとうるさかったんじゃないかと。あのご迷惑をおかけしたのではないかと、ちょっと反省しております。その委員長さん、熱心さのあまり、ということだと思っております。私も、もしも今の、この時点ぐらいにある意味で理解しておりましたら、場合によっては地区協議会で出席の部を設けました。それからあの、プログラムの分科会を設けたんですが、ロータリー家族っていうものも設けてよかったかもしれない、と思っております。でいろんな、こう、十分わからないというまんま年度に入り、展開してきてると思っておりますが、いま言えますこと、ひとつはですね、先ほどいいました、その手続き要覧にかかえれおります、推奨クラブ細則の親睦活動委員会のところを見ていただくとわかるんですが。これはですね、あの、僕もこれ見て、あ、と思ったんです。つまりこれは、会員相互の親睦に関わる活動なんですね。そういう風に書かれているんですよ。ですから、R Iとしては会員相互のでない活動という意味で、ロータリーファミリーが出てきても、あの、それは自然だったのかもしれない。ただ、日本の、特に我々の地区におきましては、親睦活動の中に家族親睦会というものが、もう十分含まれてきて展開しておりますので、親睦という局面に限って言えば、ロータリー家族と親睦活動委員会をわけることが非常に難しい状況まで来てた。でも、ま、もともとのR Iの規定しております家族親睦会の規定からすれば、会員相互のということにくくって書いてある、ということからしますと、それ以外の人たちの親睦に関わること、という委員会ができて不思議ではなかった、ということが、今は認識しております。で、さらにですね、その親睦活動だけではなくて、その奉仕活動の局面にも、そのファミリーを巻き込んでいこう、と。例えば、このローターアクト、アドベンチャーなんかはいい例だと思うんですけどね。そういうその新世代と呼ばれる人たちを、最大限に参加していただいて展開していく。これも、その非常に意味のあることだと思います。ま、もうひとつは、もともこの週1回あって、仲間であってなおかつ活動も一緒にやっていくという、非常にあったかい、アットホームな、思いやりのある集まりであるロータリークラブの仲間。これが、その退会されたかたも、ロータリーファミリーだという呼び方でくくっておりますので、ま、退会された方の話をちょっとさせていただきますと。いまこの時点での増強は非常に難しい。かえって、そこにいたいという願望をお持ちの方が経済的な状況のためにやめなければいけない、というこ

とがある。で、やめられた方はできれば、景気がよくなれば戻りたいという願望をもっておられるかもしれない。それから、その自分の取り巻きの知人を、誰かを場合によっては足柄ロータリークラブに推薦しようと思っておられるかもしれない。えー、そのあったかさを、ちゃんと記憶されて、そのままである間は、ですよ。ところが、ロータリークラブは、退会された方に対する手法をもっていません、基本的に。ですから、何となくごぶさたするわけですよ。で、親しかった仲間も、友達としては変わらないはずなのに声をかけてくれない。それから、クラブからも1年ぶりに家族親睦会に呼ぶっていうのでは、本当は遅いわけで。何かで声をかけてほしい。でも、できない。年度がかわって、会員名簿から自分の名前がなくなると、儀礼的な挨拶もこなくなる。そうしますとやがて、なんだろうロータリークラブって、という感覚を持つようになる。こうなりますと、えー、その人と、その取り巻きのその方の知人も含めて、ロータリーの増強の裾野としては機能しなくなるわけですよ。反ロータリー的な集まりになっていくという。こういう典型的な例が公式訪問してあったんですね。やめた会員同士が、定期的に集まって、やめたクラブの悪口を言っている。そういう集まりを定期的にやっておられるところがある。そうすると本当に地域社会って、狭い地域社会の中では増強という可能性が絶たれてしまうという。そういうところがあるんですね。えー、ですから、ですからといっちはなんですよけれども、あくまでもロータリーのよさを主張していこうというのであれば、やむ終えずやめられた方にも、その直後、仲間であったロータリアンが何名か、こう意識的に声をかけてあげる。こう、どうしてる？元氣？みたいな。これはそのゴルフに誘う、ということではね、達成できないんですね。ゴルフをやるということと、ロータリークラブに戻る、ということは、根本的に私は違うと思うんですね。「あいつとはゴルフ一緒にやってるから大丈夫だよ」っていったって、戻るという保障は全くないわけで。そうではなくて、やっぱりそのあったかさというものを、その方に直後に投げかけていく。クラブとしても、特別な集まりがあるわけじゃないけれども、いらっしゃいませんか？と声をかけていく。そういう手法があったほうが、これからは、こういう難しい時代にあって増強を考える場合には、非常にこう迂遠な方法かもしれませんが、大切なことではないか。これもやはり、ロータリーファミリーという、その精神としての、気持ちとしての暖かさをやめられた方にも続けていくということは、必要だろうなあというようなことは思っております。

## \*クラブ会報作りについて

松宮ガバナー 地区のほうはですね、月信を昨年中西年度はあんなふうにインターネットに貼り付けることで、配信をしなくなったにもかかわらず、何故、また紙で出すのかっていうご批判を受けておりますが。私は、こういう過渡期にあっては確かに、段々見なくなる人の数のほうが増えている。例えばインターネットが出来てもですね、ロータリーに関心がなければ、そのホームページを開いて、月信をみようという意欲にならないわけで。これは能力としてインターネットを扱えるかどうか、ということとは関係ないんですね。関心があるかないか。で、私としてはですね、伝えるべきこ

とが伝わらないといけないと。つまり、経費削減が先か、それとも伝えるべきことをつたえることが先か、という選択を迫られたときに、やはり伝えるべきことを伝えるほうが先だと。で、その上で、それがまずかなったうえで、経費削減を考えるということやっていくしかないな、ということで今回、紙で配信をしている、ということになっております。で、なるべくあの、華美にならずカラー写真は使わず、全ての体裁はこの、あまりセンスのない、これで1年間通すつもりですので、そういう意味で、表紙のお楽しみは昨年のようにありませんけれども、中で伝えることは一生懸命書いていきたいと考えておりますので、ご理解頂きたいと思っております。で、クラブの運営とか例会のことについて、ちょっとここで一番よくご存知のガバナー補佐の西田さんからちょっと気がついた点とかをお話頂きたいと思っております。

西田ガバナー補佐 ちょっといまボンヤリしていたものですから……。あの、私今日のこのフォーラムをお聞きしてしまして、非常によかったと、感心しております。私はどちらかというと、フォーラムっていうよりも、クラブ協議会、かくあるべし、というような感じで受け止めました。クラブ協議会って本来こういうふうに進めるべきであると私は理解しているわけですがけれども、どうも計画書を順番に読み上げて終わって、実があんまり浮き出てこない、というのがいずこのクラブも同じような傾向にあるようでございます。そういう点、今日のこの状況をですね、皆様、あたまにとどめていただきまして、クラブ協議会を今後開かれるときはですね、こんな風に個々のご意見なんかも十分交えましてですね、協議し、相互調整ないし、お答えを出すようにして頂ければ、本当にいい、機会になるんじゃないかと思っております。それから話は変わりますけれども、私、こここのところアチコチ各クラブのクラブ協議会に出席しておりますんですが、その例会で気づくことはですね、新会員に自分になった場合にこの例会で果たして、その会員に満足できるようなものを与えてるのかどうかっていうことなんです。というのもですね、例会はロータリアンの道場であって、入りて学び、出て奉仕というようなことを掲げているぐらいでして、例会に出席すれば何がしかを得て帰るというところである、ということになってるとすればですね。いまのクラブは概ね、そういう点では不十分であると、言わざるを得ないと思っております。と申しますのはですね、例会に出席しまして会員はですね、どのような形で何をする事ができるかっていうことを考えてみたときに、あの、大かたのクラブはR Iないしは地区からですね、いろんな文書がまいてあります。その全てがですね、そういうものを来た、という幹事報告で終わるわけです。ご関心がある方は事務局においてありますので、っていうのがどのクラブにもございます。これひとつ、変えていただきたい、と。昨日、小田原中ロータリークラブのクラブ協議会に出席しましたら、雑誌委員長さんが前に出ましてね、ちょうど友が新しいのが届いたものですから、それ急いで見まして。要点をこう、何ページのどこを見てくれとか、こういうことが書いてあるとかっていうことを、ある程度時間をとらえてですね、報告しておられました。で、皆さん、会員の方は友が手元に来ておりますから、すぐ見れるし、そういうことが今回の友にはこういうことが書いてあるんだなっていうことが知ることができません。ですから前向きな方でしたら、そういう風な指摘があれば、そこを読む気持ちに

なると思います。・・・じゃ、あの、いいクラブですよ。

松宮ガバナー それと同じように、つまり、報告もですね、来信を受けた幹事さんなり、あの会長さんが、どのように理解したかという、その自分の言葉で語りなおすという、その働きかけがあると、単なる来信の報告だけにならないという、そういうことが、おっしゃりたいんだと思うんですね。

西田ガバナー補佐 いまあの、例えばガバナーから寄付のことについても触れていただいたんですけども、私は前年度地区の財団委員長を務めておりまして、その前はポリオの委員長を務めてたんですけども、それを私は委嘱状を頂いて、そういう役割を担わされたものですから、それなりに一生懸命に努力したつもりでしたけれども、おおむね総スカンをくいましたね。私どもは、それをお伝えするときにですね、もうロータリアンですから、基本の思いやりの精神は十分慣用されておられる方だっという前提でお話しているわけです。ですけども、ロータリーはボトムアップで、主体はクラブであるっていうようなことで、クラブがそのプログラムを選択することが出来るんだっていうようなことでいきますと、表面上のそういうあれをとらえましてね、寄付、寄付というな、とか。強制じゃないんだろう、と。強制じゃないんだろう、と問われるのはですね、しなくたっていいんじゃないかっていう、そういう意識のもとに発言をされているんですけども、皆さんよくあの、これからやはり地区としましては、ある程度R Iのひとつの組織の部分でございますので、R Iの方針というものを皆さんにお伝えして皆さんに応分のご活動をやっていただく、ということを目指すのは当然であるっていうのは当然なんですね。ですから、寄付の額が目標額を多いに超えて多額になれば、それはそれでひとつの考え方ですし。目標にギリギリであるということも、クラブ事情によってはひとつの考え方でやむ終えないことだと思います。いずれにしてもですね、それによって例えば財団でございますと、国際親善奨学生とか、そういうものがですね、緒方貞子さんみたいな方がですね、どんどん育ちましてね。この間の新聞見ました？国連にいま800人くらい日本の方が働いているっていう。それがその、相当の方がですね、ロータリーの財団奨学生であるっていう。第2回の財団奨学生が、緒方貞子さんだそうですね。そういう風に非常にですね、人間を育ててるっていう事実もございます。これによって我々が期待する、世界平和とか何とかっていうような念がですね、かなり進めていける可能性があるっていうこと。我々が1万円とか2万円出すっていうそのお金がですね、予想外にその効果を生んで、大きな力になっていくであろうと、そういう風に思われるわけですから、そのへんのご理解をですね、ぜひお願い申し上げます。

### 加藤会長お礼の挨拶

本当に松宮ガバナー、西田ガバナー補佐ありがとうございました。今日11時からガバナーとガバナー補佐、そして私どもの役員と懇談をさせていただきまして、非常に松宮ガバナーの人間性のよさって言うんですか、完成されたロータリアンという感

じを受けさせていただきました。どうしても地区協なんていきますと壇上の人っていうことであまりこう話をわたしもしておりませんでしたけど、非常に気さくな、色々な話をして、非常にわかりやすく説明をして頂けるという、非常に今日は私もワンステップ、会長としてあがったのかな、という風を感じております。ま、そういうことで、私どもはロータリー活動を前向きに一生懸命がんばっております。地区の中でも時々なにかいやみを言う方もいるみたいですがけれども、いやみに負けないで頑張っていきたいと思っていますので、どうかご指導よろしくお願い申し上げて、フォーラム終わらせていただきます。どうもありがとうございました。